

『愚<sup>おろ</sup>かしくもおかしな物<sup>ものがたり</sup>語』

作者 浅羽 一

「現在」

(雨って、漫画みたいな形して降ってるんじゃないんだな)

子供の頃から教えられてきた流線型の水滴の形は、しかし初めて見た雨の姿とは違っていた。下から押し戻そうとしている空気。それを押しつけて地上に落ちていこうとする雨滴。空気の抵抗に邪魔される雨粒は、幻想とはほど遠く、変にひしゃげて不細工だった。

自分の中に、妙な空虚さが広がるのを実感した。せめて最期の一瞬くらい、何かしら夢を見られたって良かったのに。最後の最後まで、やっぱりこの世はあるがままだった。

(結局、そんなもんだからこそ、今もこうして降っているのか)

あまりにも単純で、だからこそその真実だ。

恐ろしく小さな一つの点を真横に引き伸ばし、そのまま永遠にまで広げていく様な、酷く間延びした感覚の中。やがて不思議な時間は刹那で過ぎていき…。

私の体は雨を追い越して地上に落ちた。

「過去」

思えば、生まれた時から奇妙な人生だった気がする。まず、生後ゼロ秒で私は死にかけてそうだ。と言うか、死んで生まれてきたと言った方が正しいのだろうか。生まれた直後、産声を上げなかった私は、病院の人間に足を掴んで逆さづりにされたまま、尻を何度も叩かれていたらしい。五発目でようやく産声なのか、それとも単なる泣き声なのか、とにかく私がそれを上げた時、母親は「自分の方こそ生き返ったと思った」と、私が八歳の時に語ってくれた。

その二月後に母は呆気なく肺炎で死んだ。最後は声も出なかったそうだ。

中学一年生の時、国語の教師から夏休みの課題として「詩を書いてこい」というものが出た。私はとりあえず、その夏に見た映画か何かの影響を受けて―確か、荒唐した惑星に降り立った一組の男女が、何とかその星を緑豊かなものに変えていこうと奮闘する話だった―、「未来は素晴らしいものだ」と言った内容の詩を書いて提出した。その学期末に渡された成績表で、国語の成績は見事に「C」だった。ちなみに上から「A・B・C」の三段階評価の学校だった。

次の年、中学二年生の夏休み。またしても同じ教師から、さらにまたしても同じ内容の課題が出た。私は少なからず一年前のことを根に持っていたので、今度はありつたけの想いを込めて「世界なんてくそ食らえだ」と言った内容の詩を書いた。何とその年の学内代表に選ばれて、県の審査の二次選考までを通過した。教師たちは幼い頃に母親を亡くした

私の葛藤が、そのたった一枚の薄い紙切れに如実に表れているのだと絶賛していた。私はそれに喜ぶよりも、あまりにも虚しい思いを感じただけだった。結局、私の詩は最終審査である三次選考で落ち、「佳作」までにしか選ばれなかった。落選の理由は「あまりにも暗いから」というものだった。その年の金賞には「私が夢見る緑の惑星」という題名の詩が選ばれていた。ただし、学期末の成績表で国語の成績は「A」になっていた。

高校に入ってから水泳に目覚め、何と二年生の時には県大会で優勝することも出来た。さらには、当時、私が片想いをしていた同じ部の女生徒からも告白されて、晴れて私はメダルだけでなく、生まれて初めての恋人までをも手に入れていた。ただ、わりと良く話をしていた数人の友人たちは姿を消した。

けれど、そんな幸福な日々は束の間の事だった。高校三年の時に練習中に怪我をしてしまった私は、そのまま思い通りに回復することも出来ず、結局、その年の大会では予選通過すら出来なかった。顧問の教師たちは私を慰めるより早く、私の代わりに予選を通過した一年後輩の男の下へと駆け寄っていった。翌日、私が顧問に呼び出され、「大学の推薦が取り消された」という話を聞かされていたまさに同時刻、私の恋人はその後輩と二人でラヴホテルに行っていた。私はさらに翌日、退部届けを提出した。それからしばらくして、疎遠になっていった友人たちが戻ってきた。けれど高校卒業と同時に、もう二度と会うこともなくなつた。二年後、風の噂で恋人だった女と後輩の男が「出来ちゃった結婚」をしたという話を聞いた。男は水泳を止めていたらしかった。

専門学校をほとんど行かずに卒業して、それから一年間は、何をしてもなくブラブラと過ごしていた。バイトで金だけはある程度貯まったが、その年の終わりにバイクで事故を起こして、怪我の治療費に全て消えた。相手の居ない単独の事故だった。原因は、誰かが戯れにブレーキホースを切ったせいだった。最後まで犯人は捕まらなかった。警察の間は「働きもせずにバイクなんかに乗っているからだ」と嫌味を言ってきただけだった。ただ、「苦あれば楽あり」なのかどうか。退院して三ヶ月後、私は父親の友人の紹介で運良く就職することが出来ていた。怪我が治った直後に就いた仕事は、タイヤ会社の営業だった。面接でバイクの知識を披露したのが決め手らしかった。

れっきとした社会人として新たな一步を踏み出した私は、当然のことながら下げたくもない頭を下げ、領きたくもない話に微笑みを浮かべて頷いたことがあったとしても、それでも基本的には順風満帆だったと言えるだろう。ある意味では、「やれば出来る」のだという実感を数年ぶりに思い出していたとも言えた。だから私は、大げさだと人は言うかも知れないが、自分では本当に死に物狂いで頑張っていたつもりだった。そしてやはり「やれば出来た」のだ。私は二十四歳の誕生日を二週間後に控えたその日、会社内で最年少の営業部の係長になることが出来た。こんなものは余所の会社では珍しくも何ともないことなのかも知れないが、私にとっては純粹に喜ばしい出来事だった。しかも、さらに私には同じ部内の恋人が出来た。ようやく、私は息を吐くことが出来た。

しかし、だ。私が二十四歳の誕生日の夜を恋人と二人で過ごしてから、たった五週間後、突如として私の会社が扱っていたタイヤに欠陥が発見された。さらに悲劇的だったのは、その欠陥のせいで交通事故が発生し、二人の若い夫婦が死亡してしまったと言うことだった。経営は面白いくらいに極端に悪化。会社の前では常にマスクミが列を成し、私達はいつも建物の裏側などから入社しなくてはならなくなつた。そして責任追及が始まってすぐ、

「このタイヤを実際に売ったのは誰だ」と言うことで営業部に白羽の矢が立った。後はあの意味もの凄く順調に流れていった。管理職に就いている者の内、誰か一人が責任を負わなければならなくなり、必然的に私が選ばれた。一瞬、私はこの日の為に出世することが出来ていたのではないだろうかと思えた。庇ってくれる人間は誰一人としていなかった。すぎる様にして恋人に電話したら、それに出たのは課長だった。恋人は、私の上司とも不倫をしていたのだ。これは公表されなかった事実だが、事故で死んだ若い夫婦がタイヤを買った店、そこは課長と金銭的な繋がりがある企業の店舗だった。

私があの当時、最も救われた人物と言えれば紛れもなく父親だろう。父は幼い頃から男手一つで私のことを育て上げてくれ、私がどん底にいた時も何も言わずに迎え入れてくれた。本当に恥ずべきことだと思ふのだが、私はこの時になって初めて、父親に心の底から感謝した。この時まで私は、「彼は父親であり、自分は息子であるのだから」と言う単純な理由で、全てが許されるのだと身勝手に思っていた。久しぶりに再会した日の夜、彼に注がれて飲み干したビールは、酷く苦かったがやけに旨かった。

私は、下を向きそうになっていた顔を再び上げることが出来た。営業マン時代に培っていたコネクションはいくらかあった。その大半は私との関わりを嫌って話を聞いてくれることさえほとんど無かったが、それでも僅か数社は私に同情してくれたのか、何とか雇用を引き受けても良いと言ってくれた。また、私がまだ若かったと言うことも大きな理由だっただろう。私はもう一度、一番下からでもやり直すことに躊躇いがなかった。なぜなら私は、「きつとまた、やれば出来るから」と、その時はまだ思っていたのだから。出世や贅沢は、いつでも取り戻せると思っていた。

やがて私が採用内定をもらい、喜び勇んで父親の下を訪れようとしたその日、私は自分の携帯電話に一件の留守番メッセージが入っていることに気が付いた。相手会社の人間に面接してもらっていたので、携帯電話の電源を切っていたのだ。着信があったことも知らなかった。やがて私は、早く家に帰ろうという気持ちを抑えながら、「何だろう」という思いでそのメッセージを再生して……。そのまま携帯電話を取り落としした。それはある病院からの伝言で、父親が路上で車にひき逃げされたというものであった。私が病院に駆けつけた時にはもう、父親はとくに帰らぬ人となっていた。父親がひき逃げにあったのは、私が到着するおおよそ一時間ほど前。私が面接官相手に「ありがとうございます」と勢よく頭を下げていた、ちょうどその頃だった。父親はほとんど即死だったらしい。

私の人生はすべからくこういった「流れ」を保ち続けていた。単なる不幸な偶然だと思っていた事実の羅列が、しかしきつとそうではないのだ言う確信を、私は父親の命を最後の代償にして手に入れたのだった。父の葬式には、ほとんど人は来なかった。

私はいよいよ加減、この不運と幸運の連鎖に弄ばれることに疲れ果てた。笑ってしまいたい衝動に駆られる日々は一月で消えた。泣いてしまいたい衝動に駆られる日々は一週間と保たなかった。結局、残ったのは虚しさだけだった。

そして私は、適当に選んだビルの屋上の縁に足をかけた。遺書は一応持ってきていたが、中身は白紙だった。それは何かを狙ってのことではなく、単に書くべきことが何一つ思い浮かばなかったからというだけだった。

やがて遺書を下に置いた直後、降っては止んでを繰り返していた雨が、また降ってきてそれを濡らした。かすかに雲の切れ間から差し込んでいた陽の光は跡形もなく消え、空は

あつという間に黒い雲で覆われた。太陽の姿が消えた代わりに激しい雨がそこから降り注いだ。唯一の字である「遺書」という文字は雨でにじみ、ただの黒い塊に変わっていった。それでも、私はそれにすら何の感慨を抱くこともなく、ただど一方ではむしろそれに背中を押される様にして。そのまま真昼の空へと体を躍らせた。

### 「未来へ」

結論から言えば、私はその後、一人の女と結婚することになる。

助かった理由はあまりにも間抜けで、しかし私に相応しいと言えば相応しいものだった。たまたまあの日、私が落ちた真下には悪天候のせいで回収が遅れていたゴミが溜まっていて、私は生ゴミの中に突っ込んだ。果たしてそれは幸運なことだったのか、それともむしろ不運だったのか。どういう理由からかは分からないが、私は右肩から先と、腰、そして右足を骨折しただけだった。私は生ゴミが発する腐臭の中で、誰かが呼んだ救急車が来るまで、意識を失うことも出来ずにもがいていた。ゴミ捨て場の周りには、決して誰も近付くことなく、しかしかといつて離れることもなく、綺麗な半円が出来上がっていた。

私は病院に運ばれ、緊急手術を受けることになり、そのまま入院した。呆気ないほどに、私は助かったのだ。

そして私はそこで一人の女と出会うことになる。それは、私と同部屋の老人を担当していた、若い看護師だった。私達は徐々に親しくなっていく、いつしか惹かれ合う様になっていた。やがて私の退院日が来て、私は再び自分の日常に戻ることとなった。病院の外で私を出迎えてくれたのは彼女だった。

だが、私が結婚したのは彼女ではない。私の退院から二年が経った日、彼女はあっさりと私を捨てて同じ病院の医師と結婚した。相手は私の手術を行った医師だった。そのしばらく前にポストに入っていた結婚式への招待状を見て、私は初めて自分が捨てられたのだということを知っていた。招待状の消印の日付は、新しく見つけた仕事でほんの二週間、地方に出張に行っていた間のものであった。それ以降、彼女は私からの電話に出なくなった。

結婚式が行われた日の夜、私を慰めに訪れてくれたのが、彼女と一歳違いの妹だった。妹は躊躇いがちなながらも、それでも真剣に「あなたを好きなの」と言ってくれた。私はそれに驚いた顔を見せながら、しかし同時に原因の分からない苛立ちめいたものと、それとは別の愛しさらしきものに全身を支配されていき…。

私はその日、妹を相手に一夜を過ごした。勿論、そんな衝動だけで彼女と結婚したわけではなかった。確かに最初は同情に甘えていたこともあった。しかし、私は彼女の優しさに触れ、紛れもなく彼女を愛する様になったのだ。だから私は結婚を申し込み、彼女もそれに応えてくれた。結婚式には彼女の姉夫婦も参加していた。

そうして去年、遂に妻が妊娠した。しばらくして妻から聞いた話では、生まれてくるの

は女の子らしかった。

私はその時、喜ぶよりも先に怖くなった。なぜなら、あれから何も起こっていないからだった。「解放されたのだ」とは思わなかった。そう思えないのは単なる怯えかも知れなかったが、そう信じられる根拠も何一つなかった。

やがて予定日まで後二ヶ月を切った時、それは突然にやってきた。妻が買い物から帰る途中でひったくりに遭い、地面に倒れて腕を折ったのだ。私は心の底から恐怖した。私はその日、大きな契約を結ぶことに成功していた。妻は全治一ヶ月だった。妻は私に「ツイてなかったわ」と微笑んでいた。私は妻に何も言わず、次の日の早朝に家を出た。

それから一週間、一度も私は家に帰っていない。帰りたい気持ちは一秒一秒、時間が世界に刻まれると同時に、私の胸に刻み込まれている。しかし、それでも私はただの一度も帰らなかった。携帯電話も家に置いてきた。二日前、新聞の片隅の尋ね人欄に自分の名前が載っているのを見た。

そして今日、娘が生まれてくるはずの日まで、後ちようど一ヶ月となった。私は再びあの場所を訪れていた。今日はゴミは置かれていなかった。自らを生け贄に捧げるつもりはない。そもそも誰に捧げればいいのかも分からない。ただ、毎日を笑って待っていることも出来なかっただけだ。本当はそうしなかった。

私はあの時と同じように、屋上の縁に足をかける。遺書は持って来ていなかった。おそらく書こうと思えばいくらでも書けたが、そもそも書く気がなかった。

時刻はちようど午後0時。太陽が真上から私の頭を見下ろしている。一度だけ、大きく空を仰いだ。雲はなく、何処までも澄んだ青色が広がっている。

私は、そのまま体を躍らせた。

娘の名前は優花ゆうかにしようかと決めていた。

〈了〉